

周縁性、語りとカテゴリー、そして搾取しない「学知」をめぐって

Rethinking Marginality: Indigenous people, migrants/nomads, storytelling and academic knowledge

山内 由理子

YAMANOUCHI YURIKO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード

先住民 移動民 語り カテゴリー 学知

Keywords

indigenous people; migrants/nomads; storytelling; category; academic knowledge

Quadrante, No.21 (2019), pp. 41-49.**目次**

1. はじめに
2. 「移動民」と「先住民」
3. 語り—カテゴリー的思考及び笑い
4. これからのリベラルアーツのために

1. はじめに

本稿は石原俊の『近代日本と小笠原諸島(2007)』『〈群島〉の歴史社会学(2013)』『群島と大学(2017)』に拠りながら、その中に見られるいくつかの論点について考察をしていくものである。筆者はこれまでオーストラリア先住民研究者として都市に住むオーストラリア先住民やオーストラリア先住民と日本人移民のかかわりについて研究を続けてきた。石原が上記の著作で取り扱ってきた「移動民」は「近代」形成のプロセスにおいて「海のグローバル化」に伴い生じた「移動する／してきた」人々である。「移動民」と「先住民」とは一見相容れないように思われるかもしれない。しかし、双方とも「近代」の形成過程において生じ／生じさせられ、「近代国民国家」「主権国家」という視点からすると、「扱いにくい」「なじみにくい」存在という側面をもってきた。ここで両者を重ね合わせて見てゆくことは、石原(2007, 2013, 2017)の課題としてきた「近代を捉えなおし」、「我々のあり方」を「裏側から問い直す」という作業にお

いて、一つの示唆になるのではないだろうか。本稿における考察の焦点は、①「移動民」と「先住民¹⁾」という対極的な表象を投げかけられてきた人々の相似性の見直し、②「移動民」の「語り」に見られるカテゴリー的思考へ／からの挑戦／逃避や笑いへの注目、③①と②の考察を踏まえての、石原(2017)が示す「これからのリベラルアーツ」へのささやかな提案である。筆者のバックグラウンドは文化人類学であり、考察の上ではミクロな部分に焦点が当たってしまったきらいもある。しかし、この書評コロキウムの主眼の一つが石原の著作を「ネタとして使い回し、対話や議論を積極的に拓こう(石原 2017: 30-31)」とすることにあるならば、この論考も些細な役には立つであろう。

2. 「移動民」と「先住民」

考察の第一点目は、「移動民」と「先住民」という往々にして対極的に語られてきた人々の相似性を見つめなおすことである。石原(2007, 2013,

¹⁾ 今日「先住民(Indigenous People)」とされる人々の範囲は多様に広がり、様々な議論の対象にもなっている。ここでは、そのような議論には立ち入らず、今日の「先住民」というコンセプトの原型を形成してきた入植社会国家の「先住民」とされている人々をここでの「先住民」として取り扱う。「先住民」の概念にまつわる議論に関しては窪田・野林編(2009)など参照。



2017) が描いてきた「移動民」は「移動する／してきた」「雑多で曖昧で流動的」な人々であり、その一方で今日「先住民」とされる人々は「未開」「土着」「太古から変化しない」という表象を投げかけられてきた (ヘンリ 2003)。しかし、この対極的に表象されてきた人々は、双方とも「近代」形成過程において生じ／生じさせられたのであり、近代国民国家や帝国などの近代の諸装置との関係からみると、そのルーツは重なり合う。スチュアート・ヘンリ (2003) は「近代」の創造において、「未開」「野蛮」「土着」「変化しない」という先住民の表象が「文明的」「進歩的」な「我々 (近代西洋及び日本)」に対置されてその存在を確保するものであったと論じる。だとすれば、「先住民」を移動、変化しないものとし、「移動民」と「先住民」を全く異質なものとしてとらえるような発想、つまりこの両者間の「分断」を近代を支えてきた発想の一端と考えることもできるのではないだろうか。

石原 (2007, 2013, 2017) の取り扱ってきた「移動民」は「海のグローバリゼーション」に伴い生じた。彼らは 19 世紀の捕鯨船の低層労働力というグローバリゼーションの前線かつ底辺という立場から離脱・逃亡し、海賊となったり太平洋の島に住み着くなどして流動的で自律的な生の領域を形成してきた人々であった。その出自は、欧米諸地域や太平洋・インド洋・大西洋などの世界各地にわたり、その経歴も寄港船からの脱走者、漂流者、島民の財を狙う略奪者など雑多であった。ここで着目すべきは、彼らの中には、西洋人の低賃金労働者だけではなく、生計の基盤を奪われた新大陸の先住民や捕鯨船にリクルートされたり誘拐されてきた太平洋諸島の「原住民」らが含まれていたことである。石原 (2007, 2013, 2017) が中心的に取り上げる小笠原諸島においても 1830 年に最初に組織的に住み着いた移民団にハワイの先住民が含まれていた。大航海時代以降、領土と資源を求めて西洋諸国は世界各地に進出していったが、その過程で領土と資源を奪われる側として「先住民」と呼ばれるようになった人々も出現した。そして彼らの一部は「移動民」の中に加わっていったのである。

その一方で「先住民」とされた人々で「移動民」に加わらなかった人々も、移動をしなかったわけではない。植民地化以前より彼らはさまざまな形で移動・交流を繰り返してきたし、新大陸の発見と入植に象徴される近代社会の礎を作った植民地化は「先住民」の移動・強制移住・強制収容などにより可能とされてきた。その過程で入植者、あるいは移民などその他のグループと先住民は多様なやり方で接触・交流を続けてきたのであり²、彼らの現在の在り方にもその歴史は刻み込まれている。先住民の言語、習慣などには接触・交流の歴史が反映されており、彼らの中には先住民以外のルーツを持つものも少なくない。先住民の多くは現在でもそのような歴史・変化を認めない法・政策システムの下に置かれているケースが大半であるが、近年彼らの経てきた多様な接触や変化の歴史にも目が向けられるようになってきた (e.g. Clifford 2001, Ganter 2006, Katz 1986, Mamotova 2017, Weaver 2017)。そこで見えてきたのは Mamotova (2017) の描く日本人の父を持ち韓国語を母語とする「シベリア先住民」や Ganter (2006) の描く日本人や東南アジア人の父とオーストラリア先住民の母親を持つ「オーストラリア先住民」など、実のところ「雑多で曖昧な人々」である。

このように「移動民」「先住民」は双方とも「近代」により作られた存在である。一方は「移動」する「雑多で曖昧な」人々、であり、もう一方は「土着の」「変化しない」人々とみなされてきたが、その実彼らのルーツは重なり合う。双方とも領土的境界で囲まれた均一な国民を基本とする「近代国民国家」「主権国家」にはなじみがたい存在であり、それにより捕捉された場合は当局による行動の制限・監視など厳しい管理の対象となった。もちろん、彼らへの扱いが全く重なり合ったわけではなく、例えば、近代日本の形成において「アイヌ」のような先住民の表象も形成されたが、小笠原諸島に定着した「海の移動民」をルーツとする人々——「帰化人」「異人」と呼ばれた人々——は「得体がしれない」とされ恐怖はされても、「先住民」

² 例えば、アメリカ先住民とアフリカ系の人々の交流に関する Katz (1986)、オーストラリア先住民とアジア人移民の交流に関する Ganter (2006) など。

に押し付けられたような「未開」の表象は投げかけられなかった。しかし、そのような表象の形成のプロセスにおいては、先住民も「得体のしれない人々」という恐怖の対象とされてきた歴史がある (cf. Rowse 1998)。前述した様に先住民の特定の表象が近代において「文明的」「進歩的」な「我々」の確立のために必要であったとすれば、「移動民」と「先住民」のルーツとその交錯を更に洗いなおし、共有されるものに目を向け両者の一方的な表象を突き崩すことは、「近代」を裏側から考え直す一つの足掛かりになるのではないだろうか。

3. 語り—カテゴリー的思考及び笑い

第二点目は石原 (2007, 2013) が中心的に取り上げてきた「海の移動民」をルーツに持つ小笠原諸島の「帰化人」「異人」と呼ばれてきた人々の語りへの更なる注目である。まず考えたいのは彼らの語りに見られるカテゴリー的思考へ／からの挑戦／逃避である。民俗学者瀬川の 1930 年代に実施された調査に拠りながら、石原 (2007) は彼らの語りを引く。例えば、「南方のカナカ系の女性、ケテさん」には下記のような語りがある。

「…もし戦争が起こって日本人が私を異人だから、と、殺そうとしたとき、私の子どもや夫は見殺しにするのでしょうか。それと同じで異人がここに攻めてきたとき、私ばかり助かって子供や夫を殺させるのでしょうか。異人といったって私はこの島の草分けで、日本人よりも早くからここに住んでいたのですもの…」
(瀬川 1970: 285) (石原 2007: 55)

ケテさんは「日本人」である夫の低収入を補うために様々な労働をしながら生計を立てていた。彼女の語りの中に石原 (2007) は、彼女のような人々が日本による小笠原諸島の「回収」「征服」の中で「帰化人」「異人」と他称され、法や治安のかく乱要因として国家の法やテロルの標的になりかねない—特に戦争の間近になった時代には—状況が刻み込まれていると指摘する。

また、瀬川に小笠原諸島に移住してきた自分の祖先のことを語る際に、ケテさんは「昔、南洋か

ら二家族移ってきたそうだが、母島の王様はケテという人でした…」(瀬川 1970: 282-283) (石原 2007: 63) という「神話的エピソード」を語る。ここに石原 (2007) がみるのは、近代国民国家の支配に対し、その法の臨界領域で展開してきた移動民の実践や彼らが行ってきた暴力の凝縮であり、彼らの流動的で自律的な生の「アナーキカルで反抗的」な〈断片〉である。

このような語りに関して、筆者は、石原 (2007) の分析を否定するのではなく、ただ、それより一歩足を進めてこの語りとそこに見られるカテゴリー的思考へ／からの挑戦／逃避を追及してみたい。この点に関しては、Michael Jackson (2013) の「語り (storytelling)」に関する論考を主なよりどころとし、筆者の調査対象であるオーストラリア先住民と日本人移民の子孫である人々の語りをも参照しながら考えていきたい。Jackson (2013) はハンナ・アレントに拠りながら「語り (storytelling)」とは、個人的なもの (private) を公 (public) のものへと変換する方法であると同時に、自分の力の及ばない状況において、語り手のエージェンシーとしての感覚を保つ方法でもあるとする。二つ目の点に関しては、「帰化人」「異人」と名指しされ、テロルの標的となりうる恐怖の中でケテさんが「異人」といっても自分たちはこの島の「草分け」であること、また、自分の祖先は「王様 (女王様)」であった、などと語る中によくみることができる。国家による「征服」の歴史に対し、このような語りをする中で「歴史」を再構成し、自らのエージェンシーを回復させる戦略がここにあるといつてよいだろう。これは石原 (2007) の分析とも重なり合う。

個人的なもの (private) を公 (public) のものへと返還する、という点に関しては、もう少し説明が必要である。このプロセスにおいて機能を果たすのが「カテゴリー化」である。「公」に意味を持つ、つまり社会に「認知」される存在になるには、個々人の体験は「日本人」「オーストラリア人」などのように何らかのカテゴリー的な存在の体験となる必要がある。個人の経験は「語り (storytelling)」なかで例えば「日本人」「オーストラリア人」の経験として変換され、それによって他の人々にも「共

有可能」なものとなる。「語り (storytelling)」は個人の経験をカテゴリーに媒介し、それらのカテゴリーの持つ意味を強化する。しかし、一方で「語り (storytelling)」がカテゴリー自体を疑問に付してしまうような場合も存在する。それは、例えば難民の経験など、国民国家、エスニックアイデンティティなどの我々が通常馴染んでいるカテゴリーを、その圧倒的な複雑さと重みにより無意味化してしまうような語りである。そのような語りは我々がカテゴリーにより意味を付与する方法を疑問に付すのである。

Jackson (2013) は、このような語りの両義的構造に関し、人間は社会に埋め込まれていると感じる必要があると指摘する一方で、エスニックアイデンティティのような文化的アイデンティティには、そのカテゴリーの中に入れられる人びと同士の違いを無視する危険があると論じる。難民の経験のようなラディカルに文化的アイデンティティから外れるものを受け入れるということは、西洋的学問につきものの西洋中心主義や知性偏重主義から離れ、「他者」を文化的アイデンティティや知識という枠に押し込めることなく、彼ら自身の生きてきた経験という見地から見、その人間性を理解することにつながると彼は示唆する。現代社会において弱者的立場、周縁的な立場に置かれたものの語りにおいてみられるのは、文化的アイデンティティのようなカテゴリーを形作る「差異」——国籍、エスニシティなど——を無意味化するような話であり、Appadurai (1996) の論じる「ディアスポラの多元性 (diasporic pluralism)」の方が優位を占める経験なのである。

以上の観点より、ケテさんの以下の語りに戻ってみよう。

「…もし戦争が起こって日本人が私を異人だから、と、殺そうとしたとき、私の子どもや夫は見殺しにするのでしょうか。それと同じで異人がここに攻めてきたとき、私ばかり助かって子供や夫を殺させるのでしょうか。異人といったって私はこの島の草分けで、日本人よりも早くからここに住んでいたのですもの…」
(瀬川 1970: 285) (石原 2007: 55)

ここには確かにテロルの恐怖も見られるが、同時に、夫や子どもは「異人」「日本人」というカテゴリーに従って彼女を「異人」として見殺しにすることはなく、彼女自身も同様の立場にあった時には夫や子どもを「日本人」として見捨てることはない、という信頼をも見ることができる。「日本人」「異人」というカテゴリーは究極的には無効となるとケテさんは言っているのだ。ケテさんは彼女のことを「異人」呼ばわりする夫にいらだち³、夫に代表されるような「内地人」の生き方に対し、自分のルーツである移動民の流動的で自律的な生のリズムを対比させる⁴。しかし、その一方で、彼女には夫を支えながら「働いて働いて、働きぬいて」生きてきた経験がある。「異人」「日本人」というカテゴリーを無意味化させるような彼女の語りは、この共に生きてきた経験にあるのではないだろうか。小笠原諸島の「異人」「帰化人」とされてきた人々は、「雑多で曖昧で流動的」とされ、近代日本という国家の形成の中では周縁に追いや

³ 「…父さん [= 夫] は、酒につられて、いつまでもまごまご働いているんだ、と私がいうと、お前は我利我利で世間のつきあいを知らぬ、アメリカの兵隊は、給料を出さないと働かない、というから、あわれなもんだ。日本などは命を投げ出して戦争するんだからな。異人の根性は見下げたもんだ、とにつくらしいことをいうんですよ。ふた言めには異人は下等だといいます」(瀬川 1970: 284) (石原 2007: 54)

⁴ 「…私のおやじさん [= 父親] はちょっと変わった人で、子どもが九人もあるのに、ポッポと別の所へ行く人でしたので、土地も何もみんな取られてしまいました。お父っつあん (夫) は、だから酔うと、異人は馬鹿だ、と私のことをいうのです。おかしくって、おかしいですよ。わたしはこのとおりのんきなものですから。ハハ…お父っつあんは内地人ですからどうしても私らより利口です。お父っつあんは正直一方の人で、まちがったことをしないという性なのです。私らはとてもんきで、小さいときには、外にあるものはとってもよい、人の家の中のものとはとるものではない、などと教えられて育ったほどのんきでしたからね。どうしても内地の人は利口ですよ。」(瀬川 1970: 281-282) (石原 2007: 68-69)
このケテさんの言葉に関し、石原 (2007: 68-69) は、ケテさんは「利口」で「考えがある」「内地人」に比べ、「とてもんき」で「土地も何もとられてしまった」自分の両親や兄弟のことを後悔もせずに語り、自分たちの「国家の定める土地の所有権などにはおかまいなく (石原 2007: 69)」暮らしてきた流動的で自律的な移動民の生のリズムを肯定している、としている。

られた人々である。彼らは「異人」「日本人」の「差異」だけではなく、彼ら自身の「雑多な」ルーツという差異をも内包しながら生き抜いてきた。ケテさんに見られるように、彼らの語りの中には、そのような経験から生まれた「ディアスポラ的多元性 (diasporic pluralism)」の醸成を見ることもできないだろうか。

ここで、「雑多で曖昧」な人々の別の例として筆者が調査したオーストラリア北西部の町ブルームの日本人とオーストラリア先住民のミックスの人の経験と語りを参照してみよう。ブルームは 1880 年代から 1960 年代まで真珠貝採取業により発展した町であり、その繁栄に魅かれて日本人を含む様々な人々——東南アジア人、西洋人、南アジア人など——が押し寄せ、現地の先住民を含む「雑多で曖昧な」人口を作り上げた。白豪主義による移民制限や第二次世界大戦における日本人・日系人強制収容及びその後の強制送還に関わらず、これら日本人移民のうちの数人は定住し、オーストラリア先住民を含む現地の人々と共存していった。現在のブルームにおいては、第一世代の日本人として残っているのは 3 人であるが、日本人のルーツを引く人々は数多く存在する。ここでは、そのような中で日本人、オーストラリア先住民 (アボリジニ⁵)、フィリピン人のルーツを持つ I 氏の経験と語りを見てゆくことにする。

I 氏の父親は 1910 年代に西オーストラリアに渡り、真珠貝採取業に従事して働いていた。彼は 1930 年代後半にオーストラリア先住民とフィリピン人のミックスの女性と結婚し、1942 年に三番目の子どもとして I 氏が誕生している。当時、このような結びつき自体は珍しくなかった。ブルーム社会の根幹にあった真珠貝採取業に従事したダイバー職は日本人、東南アジア人が主流だったが、彼らは基本的に男性の契約労働者であった。現地のアジア人女性は極度に少なく、当時の人種間ヒエラルキーによりアジア人男性と西洋人女性との「交流」は難しかった。このような中で、日本人

やその他のアジア人移民の男性の多くが関係を持ったのは先住民または先住民とアジア人や西洋人のミックスの女性であった (Ganter 2006)。しかし、結びつき自体は珍しくないものの、当時のオーストラリア当局はオーストラリア先住民とアジア人の結びつきを嫌い、先住民及び先住民のルーツを引く人々のアジア人との「結婚」や「事実婚」を厳しく取り締まっていた。I 氏の両親は当時には珍しく正式に結婚を登録したケースであるが、そのために二人はブルームの位置する西オーストラリア州ではなく州法の異なる隣の北部準州まで赴いて結婚を登録している (Jones 2002)。その後第二次世界大戦が勃発すると I 氏の一家は日本人の父親のみならず、全員が強制収容される。更に政府の政策により父親が家族から引き離され、母親は精神が不安定になり精神病院に送られた。残された I 氏を含む 4 人の子どもはオーストラリア北部のメルヴィル島にある先住民及び先住民のルーツを引く子どもの収容所に送られた。一家が再び一緒になりブルームに戻れたのは戦後数年してからであった (Nagata 1996)。その後 I 氏は雑貨店経営をしたり、ブルーム市議会の議員を務めたりなどを経て、1990 年代にオーストラリア先住民の先住権原が導入されると母親側のルーツからそれにも関わっていくことになる。

I 氏の家族や彼自身の経歴はブルームの古くからの住人には良く知られている。アジア人とオーストラリア先住民 (アボリジニ) の混血が盛んだブルームにおいては、彼はそのようなブルームの歴史を特徴づける「ブルームのアジアアボリジニのミックスの人々」の一員とみなされている。彼の人生に起こった様々な出来事は、それぞれが彼のエスニックなルーツによるものである。日本人のルーツを持つゆえの戦時下の強制収容及び父親の引き離し、オーストラリア先住民のルーツを引くゆえのメルヴィル島への収容。市議会議員に彼が立候補したのは、「白人」の真珠貝採取業事業主による「有色人」への差別に対する反発が原動力であり、先住権原へのかかわりは母親側の先住民のルーツがブルームにあったためである。しかし、これらの経験の総体を彼と共有できるのは、今日のブルームにおいては、ブルームのアジ

⁵ オーストラリア先住民はアボリジニと呼ばれる大陸の先住民と木曜島を含むクィーンズランド州北部のトレス海峡諸島の先住民、トレス海峡諸島人に大別される。本稿で出てくるのは「アボリジニ」の人々である。

ア人とアボリジニのミックスの人々のなかにもいない。第二次世界大戦時にオーストラリアで強制収容された日本人・日系人のほとんどは日本に強制送還され、ブルームに戻ってきたのは彼の家族を入れて9人である。その中でも家族が引き離されたのは彼の家族だけであり、さらに、強制収容を経験してブルームに帰還したものの中で現在存命なのは彼及びダーウィン在住の彼の姉のみである。現在のブルームで日本人のルーツを持つ家族の多くは戦後にやってきた日本人から始まっており、I氏の父親がこれらの人々と友人として親しく接していたとはいえ、I氏の経験を共有しているとはいえない。

I氏は母方の家族を含むブルームの「アジアアボリジニのミックス」の人々と共に戦後育ち、彼らの一員とみなされている。しかし、1990年代より導入された先住権原はここにも亀裂を及ぼしている。I氏は母方の先住民のルーツがブルームにあることにより、先住権原に関わっていくことになった。しかし、先住権原の様な政策は「アジアアボリジニのミックス」の人々の中でも先住民のルーツをブルームに持つ人と持たない人々の間で溝を作っている。ブルームにおいては、先住民のルーツを引く人々の背景も多様である。ブルームの近隣より様々な先住民のグループが仕事などを求めてブルームに来ており、また、西オーストラリア北部のキンバリー地方一帯より先住民とその他の「混血」の子どもを集めた施設がブルームの北100kmほどのところに在り、ブルームの「アジアアボリジニのミックス」の人々のうち少なからぬ数がこの施設で育った人々をルーツとしている(Choo 2001)。先住権原の導入により、先住民のルーツを引くとしてもそれに「関わられる人々」と「関われない人々」ができてしまったのである。さらに、先住権原にかかわる人々も一枚岩ではない。I氏の母親の様に先住民以外の人々とのミックスである人々は「ハーフカースト」とされ、そうではない先住民よりもかつて当局による人種政策においては「多少ましに」取り扱われてきた歴史がある。I氏のような人々とそうではない人々の間には、先住権原に関わるにしてもこの歴史に基づく後者からの不満が頭をもたげてく

ることもある。更に、特定の土地に「権限を持つ人々」を厳密に特定することを求める先住権原のシステムは、土地利用に関して従来の柔軟なやり方との間に齟齬があり、さらなる分裂をもたらしている。

つまり、I氏の経験はそれぞれが日本人、オーストラリア先住民、フィリピン人というルーツに関わり、更にそれらの人々が混淆してきたブルームの歴史に根付いている。しかし、彼の経験の総体はそれぞれのルーツを引くという点においても、ブルームという町の歴史につながる人々の間においても、それゆえであると同時にその中でも特異なものとなっている。

それでは、I氏は自分のエスニックアイデンティティに関しどのように語るのだろうか。I氏のように先住民とアジア人のミックスである人々は、ブルームの外では往々にして自身のエスニックアイデンティティに関して質問を受ける。I氏自身はそのような質問に関して、「What do you accept?」と答えてきた、という。

筆者「自分のアイデンティティについて聞かれたらどうこたえるんですか?」

I氏「うーん、『僕にどうこたえてほしいのか、どういう答えなら受け入れるのか (what will you accept)』といたりね。でも、それから、父親が日本人で母親が先住民で、母親はここで生まれて、母方の祖母とその祖先は先住民で…だから僕は先住民でもある、て話すよ…」

I氏が行っているのは、一つには質問に「What do you accept?」という質問で答え、更に、自らの父親と母親、場合によって母親の母親までさかのぼってそれぞれのルーツを語ることによって、特定のエスニックカテゴリーとしての答えを要求するこのような質問の馬鹿馬鹿しさと返答への不可能さを示すということである。このような語りは、エスニックカテゴリーを強化するのではなく、逆にそこに挑戦しあるいはそれから逃れ、カテゴリー自体を疑問に付し、無効化する。

更に I 氏は、興味深いことにブルームの「アジアアボリジニのミックス」を総称する「ブルーム・ミックス」という言葉にも曖昧な反応を示す。この「ブルーム・ミックス」とは比較的若い世代の間でよくつかわれる言葉であり、I 氏の世代 (70 代) の人々の間ではあまり聞かれないが、この言葉を提示して自分はそうだと思うか、と筆者が聞いたとき、I 氏の反応は、肩をすくめて「まあ、そういってもいいがね」というものであった。I 氏のような経験の場合、ブルームの「アジアアボリジニのミックス」を総称するくくりすらそこから逃れてしまうところが大きい。カテゴリーの中に包摂しきれない経験を経てきた I 氏の文化的アイデンティティに関わる答えは、常にカテゴリー的な返答の要求に抗して個々のルーツを語り、カテゴリー的思考へ／から挑戦／逃避し続けるものとなっているのである。

ここで念頭に置いておくべきは、I 氏を含むブルームの「アジアアボリジニのミックス」の人々——彼らの個々の経験は紐解いていけば I 氏と同じようにイディオシンクラティックなものであるが——は往々にしてエスニックアイデンティティを問われる「雑多で曖昧な人々」であるが、I 氏を含め彼ら自身にとっては、「自分自身である事」は「曖昧」でも「雑多」でもない、ということだ。I 氏がエスニックアイデンティティに関する質問に答えながら強調するのは、自分の父と母のルーツとそこから受け継いだものに誇りを持っている、ということである。当局の圧力に負けずに結婚を正式に登録し、強制収容における引き離しにあっても家族の絆を保ち続けた両親の姿や、トラウマを背負った母を支えながら厳しい労働倫理を教えた父親から受け継いだものが今の自分を作っている、と I 氏は言う。Jackson (2013) は人間には「根付いている (rooted)」という感覚が必要だという。その感覚は I 氏のような人々の場合エスニシティではなく、エスニシティに左右されながらも個々の人生を生きてきた両親から受け継がれたものであるのだ。

ここまで、ブルームの「雑多で曖昧」とされた「アジアアボリジニのミックスの人々」の一例として I 氏の経験を語りを見てきたが、小笠原諸

島の「帰化人」とされた人々の語りにおいても彼ら自身のカテゴリーに収まらぬ様々な経験とそれに基づく戦略を見ることができないだろうか⁶。そして、このような人々の語りに真剣に耳を傾けることは、我々の馴染んできた「日本人」をはじめとするカテゴリーを揺るがしていくことになるだろう。Jackson (2013) は「他者」の立場に身を置いてみる、ということは、彼ら自身が生きた生に万難を排して近づき「経験する」こととする。「他者」の理解とは自身のアイデンティティと「正気 (sanity) であること」を危険にさらす可能性すらあることなのだ。しかし、石原 (2017) が指摘するように〈冷戦ガラパゴス〉にとらわれた現代日本社会にとっては、このような人々の声に耳を傾け、「自分自身」の「アイデンティティ」と「正気と思ってきたこと」を危険にさらすことも必要かもしれない。

小笠原諸島の「帰化人」と呼ばれる人々の語りには、他にも興味深い点が数多くあるが、ここでもう一点あげておきたいのが彼らの語りの中に見られる「笑い」である。ケテさんは土地を取られてしまったことに関し下記の様に「笑いを交えて」語る。

「…私らのおやじさん [=父親] はちょっと変わった人で、子どもが九人もあるのに、ポッポと別の所へ行く人でしたので、土地も何もみんな取られてしまいました。お父つつあん (夫) は、だから酔うと、異人は馬鹿だ、と私のことをいうのです。おかしくって、おかしいですよ。わたしはこのとおりのんきなものですから…」(瀬川 1970: 281-282) (石原 2007: 68)

⁶ 小笠原諸島の「帰化人」とされた人々の語りの中に「小笠原諸島民として扱われたい (石原 2007: 255)」というものがある。これに関しては「小笠原諸島民」としてのカテゴリー的アイデンティティを標榜したいのか、あるいは押し付けられそうなアイデンティティを逃れるために便宜的に別のカテゴリーを提示したのか、双方の可能性が考えられる。また、彼らがこれまで自分たちを先住民と主張することがなかったという点も注意深く見てゆく必要がある。

「笑い」には対象を「客観化してみる」が必要であるとベルクソン（1976）は論じている。自身とその家族に起こったことをこのように「笑い飛ばす」ということは、そこに自身を客観視し、起こった出来事のリアリティをキャンセルすること、いわば、世界を「舞台」化することに他ならない。ブルームの人々の間においても笑いを交えた歌や舞台活動は盛んであるが、この「笑い」という側面も「周縁」に置かれ続けて生き抜いてきた人々を人間として「理解」するのに必要不可欠ではないだろうか。

4. これからのリベラルアーツのために

第三点目であるが、日本の大学の現状とその抱える問題に関しては、大学教員のはしぐれである筆者にとって、石原（2017）の議論と提案に反対することはない。ただ、「言うは易し」を承知で、「周縁に置かれた人びと」と「語り」に主に照準を合わせた論考をしてきた立場からあえて少し考えてみたいと思う。石原（2017）はこれからの大学においては「近代啓蒙主義的なリベラルアーツ」とは「異なるリベラルアーツ」が必要であると論じる。この「異なるリベラルアーツ」がどのようなものであるべきなのか、それを考えていくにおいて有益かつ必要と思われるのが「周縁に置かれてきた人々」——例えば先住民——からのこれまでの大学における知への批判に耳を傾けることである。マオリの学者である Linda Tuhiwai Smith (2012: 1) は「先住民文化」の植民地化において従来の西洋的学問調査の果たした役割を批判し、『調査』

という言葉自体、先住民のボキャブラリーにおいては最も「汚い」言葉だ」と喝破する。石原（2017: 157）はレディングスに拠りながら、「近代の大学は一般に、学知の西欧中心主義的構造と、『想像の共同体』である国民文化の正当性とに立脚してきた」と言及している。Smith（2012）の言葉はそのような従来の学問において「搾取」される立場に立ってきた先住民からの痛烈な批判である。しかし、Smith 及びそのほかの近年台頭しつつある先住民知識人も大学や学問そのものを無くすようにと批判しているわけではない（Smith 自身、大学教授である）。石原（2017: 157-158）は新しいリベラルアーツは「学生たちが自らの歴史的・空間的な立ち位置を国家や資本の論理に同一化せずに批判的に捉え返し、他者と共に生き抜いていくセンスを高めていくための、教育実践／思考実践となるだろう」と主張する。この「他者」には、これまで近代国民国家という「想像の共同体」が周縁にはじき出してきた人々が含まれなくてはならないだろう。そして、彼らと「共に生き抜いていくセンスを高めていくための」リベラルアーツは、彼らの批判を取り入れた、他者の搾取に拠らない知になる必要があるであろう。そしてまた、これまでの論考を踏まえて言えば「他者と共に生き抜いていくセンス（石原 2017: 158）」を高めるには、②で検討したようなカテゴリー的思考にとらわれ続けられない感覚を磨いてゆくことが必要だろう。

[参照文献]

- Appadurai, A. (1996) *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press
- ベルクソン, H. (1976) 『笑い』 林達夫訳、岩波文庫
- Choo, C. (2001) *Mission Girls: Aboriginal Women on Catholic Missions in the Kimberley, Western Australia, 1900-1950*, University of Western Australia Press
- Clifford, J. (2001) Indigenous Articulations, *The Contemporary Pacific* 13(2): 468-490
- Ganter, R. (2006) *Mixed Relations: Histories and Stories of Asian-Aboriginal Contact in North Australia*, University of Western Australia Press
- 石原俊 (2007) 『近代日本と小笠原諸島—移動民の島々と帝国』 平凡社
- 石原俊 (2013) 『〈群島〉の歴史社会学—小笠原諸島・硫黄島・日本・アメリカ、そして太平洋世界』 弘文堂
- 石原俊 (2017) 『群島と大学—冷戦ガラパゴスを超えて』 共和国
- ヘンリ, スチュアート編 (2003) 『「野生」の誕生—未開イメージの歴史』 世界思想社
- Jackson, M. (2013) *The Politics of Storytelling: Variations on a Theme by Hanna Arendt*, Birketinget, Copenhagen: Museum Musculanum Press
- Jones, N. (2002) *No.2 Home: A Story of Japanese Pioneers in Australia*, Fremantle Press
- Katz, W.L. (1986) *Black Indians: A Hidden Heritage*, Atheneum
- 窪田幸子・野林厚志編 (2009) 『先住民とはだれか』 世界思想社
- Mamontova, N. (2017) Hybrid Identities and Indigenous Language Sustainability: Reflections on Language Contact and (Neo-)Colonial Practices on Sakhalin Island, *Anthropologica* 59: 44-59
- Nagata, Y. (1996) *Unwanted aliens: Japanese internment in Australia*, St Lucia: University of Queensland Press
- Rowse, T. (1998) *White Flour, White Power: From Rations to Citizenship in Central Australia*, Cambridge: Cambridge University Press
- Smith, L. Tuhiwai (2012) *Decolonizing Methodologies: Research and Indigenous Peoples*, London: Zed Books
- Weaver, J. (2017) *The Red Atlantic: American Indigenes and the Making of the Modern World, 1000-1927*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press